

内村鑑三と金教臣

—無教会主義を中心として—

呉 敬姫

キーワード 無教会主義、日本的キリスト教、朝鮮的キリスト教、愛国心、
二つのJ

はじめに

内村鑑三は無教会主義者であった、彼の信仰は無教会、無洗礼、無聖餐の無教会信仰であった、彼が無教会派の始祖であることは、今日すでに定型化された内村鑑三の定義である。彼の弟子もまた、「内村先生の教が無教会主義です（矢内原忠雄著『キリスト教入門』17項）」と定義する。

この事は日本国内だけにとどまらず、海外にまで波及して、知名度の高い神学者までが内村のキリスト教を無教会主義として論じるに至っている。「カンゾ・ウチムラ」と「ムキョウカイシュギ」は、すでに世界的に、同義異語（シノニム）¹として承認されるに至ったのである。

内村は、「…『無教会』は教会の無い者の教会であります。すなわち家の無い者の合宿所とも言うべきものであります。すなわち心靈上の養育院か孤児院のようなものであります。『無教会』の無の字は、『ナイ』と訓むべきものでありまして、『無にする』とか『無視する』とかいう意味ではありません。…」²と語っている。

また内村は、「真正（ほんとう）の教会は実は無教会であります。天国には実は教会なるものはないのであります。…監督とか、執事とか、牧師とか、教師とかいうものがあるはこの世限りのことであります。かしこには洗礼もなければ晩餐式もありません。かしこには教師もなく弟子もありません。…『無教会』はこういう教会を世に紹介せんために働くつもりであります。しかし、この世にいる間はやはりこの世の教会が必要であります。」³と語っている。

内村は欧米諸国のキリスト教を見た時に、真の福音から外れるのみならず、日本人の心性に合わない、物質的で独善的なキリスト教であると考えた。彼はこのような欧米諸国のキリスト教の精神的・物質的所産を痛烈に批判し、その教派的な信仰・教会組織・礼拝、さらには宣教師の派遣や物質的援助を拒絶す

ることにより、福音に直結する自由で独立的なキリスト教が日本に誕生すると確信した。そして、無教会は日本において具体的に実践されるべきものであると考えた。

このように欧米諸国のキリスト教を日本式に変え「日本的キリスト教」を確立することにより、これが今日、世界のキリスト教界で重要な位置を占めるに至ったのは、他でもない内村鑑三の功績に依るものである。

内村鑑三の思想を引き継いだ韓国の弟子の中に、「日本的キリスト教」を学び、「朝鮮的キリスト教」⁴を創出した金教臣（キム・キョシン）という人物がいる。本稿では、この金教臣と内村鑑三の思想について比較検討を試みたい。

彼らが無教会主義を主張したのは、教会それ自体に反対したというよりは、教会が世俗化したため、真の信仰を探そうとして直接、イエスと聖書を求めたためであり、また、形式や制度にとらわれずに礼拝をすること、およびキリストを信じる心をより重要視したからである。

本稿においては、既に発表された論文や研究⁵とは異なり、内村が無教会主義思想を創出した動機に迫ることによって、無教会主義を論じ、さらには内村鑑三と金教臣の無教会主義における共通点と相違点を検討したいと思う。

1. 内村鑑三

1. 1 生涯

内村鑑三は明治維新の7年前である1861年に、日本の武士道精神を受け継いだ高崎藩士の子息として生まれた。彼は日本古来の八百万の神々に対する信仰と忠誠心の深い、日本人の中の日本人であった。

しかし内村は札幌農学校に入学した後、1878年6月2日に宣教師M. C ハリス⁶から洗礼を受け、日本プロテスタントに属する初期キリスト教徒になった。内村が初めて出会ったキリスト教はW. S クラークの伝えたものであり、彼のキリスト教信仰から大きな影響を受けたことは事実であるが、心から平和と喜びを体験するには至らなかった。

その後、最初の夫人である浅田タケとの離婚による心の傷を癒すため、またキリスト教国の慈善事業の現況把握とその研究のために、米国に留学した。しかし、真の目的は「内なる心の分離」⁷であったと内村自身は述べている。留学過程において、彼は福音主義信仰に開眼し、キリスト教の本質を把握するようになった。

米国から帰国した後、後に述べる不敬事件⁸と二番目の夫人である横浜加寿

子の死により、深い悲しみと苦悩に陥ったため、札幌にいる友人を訪ね、そこで慰労と安息を得るようになった。

内村が無教会主義を積極的に主張し始めたのは、不敬事件の後、キリスト教会から背を向けられるようになってからであると、一般的に考えられている。彼は不敬事件の後、社会から非難・迫害されている時、キリスト教会からも冷遇された。それゆえに、積極的に無教会主義を主張するようになったのである。⁹

内村は1900年に『聖書之研究』を創刊し、これに尽力した。それに伴い、社会的言論活動や実践的な活動は減少したが、『聖書之研究』により根本的な解決方法を確信するようになった。しかし彼は、社会的・政治的問題を無視することはなく、鉋毒事件の時には被害地を巡察して「鉋毒地巡察誌」を世論に訴え、「理想団」¹⁰を結成して積極的に活動したのであった。さらに、軍備縮小・貴族制度撤廃・地方自治団体長の民選等、社会改革の方法をも提示した。

内村は日露戦争時に非戦論を主張する者として、戦争は神に反駁する罪の結果であり神の審判を受けることになることになると、日本の軍国主義者たちを非難したりもした。¹¹

1930年3月28日、日頃口癖であった「私の雑誌である『聖書之研究』を廃刊してくれ」と言いながら、内村は永眠した。

1. 2 無教会主義

米国で過ごした数年（1884年～1888年）の間に、内村鑑三は宗教的ショックを受けた。それは神の御名が濫用¹²されていたり、牧師の地位が単なる収入の対象とみなされているのを目の当たりにしたりして、墮落しきった宗教の実態に対して極めて批判的にならざるをえなかったのであった。そして彼は、宗教的仮面で偽装されているキリスト教は、実は福音的真理の正反対に転落している可能性があり、また事実、そうになっている場合が極めて多いという事実を、確認したのである。

しかし、そういう観察も、当時はまだ、いわば散発的になされていたに過ぎず、この事態に対する解決も、まだ、萌芽の段階に留まっていた。しかし、1888年に帰国してから、それに関する彼の思想はさらに深まり、その後10年余りを経て、はっきり『無教会』という一つの理念に到達したのである。1901年3月に、彼は会友誌『無教会』を創刊したが、これはいわゆる制度教会の外にあって、福音信仰を共にする人々のコイノニア（共同体）を積極的に建設して行こうとする、明確な宣言であった。¹³もっともこの雑誌は、翌年の8月までしか続かなかったが、多くの人に活発な言論の場を提供し、相互の友愛と親睦を深め

るため、大きな働きをしたことは、特筆してよい。他方内村は、『聖書之研究』に拠って論陣を張り、しばしば教会問題に説き及んだ。

欧米諸国の教会、およびその宣教師によるキリスト教の伝道は単なる教勢拡張という宗教的問題にとどまらず、植民地に対する政治的支配という問題にまで深く内的に関連していることを、内村は鋭く見抜いていた。それで、そのキリスト教の伝道による日本の被植民地化の危険を察知し、日本人独特の見地よりキリスト教の真理を示したものの、言わば「日本的キリスト教」である無教会主義を創出したのである。

1. 3 日本的キリスト教

内村の無教会主義は、欧米の宣教師によるキリスト教が真のキリスト教ではなく、墮落した人間中心の、世俗化されたものであり、他国を植民地化する際、口実として利用されるキリスト教と教会であるとみなした。内村は、このような宣教師たちのキリスト教伝道によって、日本が植民地化されるのを防ぐために、日本で生成された「日本的キリスト教」の必要性を訴え、強烈な愛国心を主張した。

内村の愛国心の根源は、いわゆる「武士道」精神にあると言える。明治初期にプロテスタントが西欧文化と共に日本に入ってきた当時、深い関心を持ち心酔した人たちは、知識欲旺盛な青年や学生であり、日本社会でも上流階級である武士階級の子弟たちであった。そして彼らは、武士道をプラスしたキリスト教を最高の理想とみなしていたが、そのような時代的潮流の中に内村もまた生きていたのであった。

内村の時代は、明治維新の支配勢力が国家に対する絶対的服従を強要する国家有機体論を展開しながら、家族主義を基盤として国家絶対主義の主張を貫徹させようとした時代であった。即ち、政治的な支配関係を解釈するに際し、家族間の紐帯関係を援用したのであり、権力的支配において生じる抵抗を最大限に緩和させることを目的として、家庭に対する感情的要素を国家に対する忠誠心に転換させ、表面的には国民的自発性を成したように見せかけたのであった。

家庭や個人の関係では年令・世代・性別・階級に見合った行動をすることにより、政治・宗教・軍隊・産業の領域においては、与えられた特権の範囲を外れないことによってのみ、「ふさわしい位置」を確保し、「安全」を感得することができた。そしてこのような家族的階層秩序は、家族と国家のみに限定されるものではなく、世界に拡大して全世界の人々を相手に、この家族的秩序を実現するべきだとする「八紘一字」¹⁴の精神へと発展していった。¹⁵

このような「八紘一字」の精神が戦争につながっていくことに反対し、「非戦論」を強く訴えたのが内村であったが、「天皇制」¹⁶と「近代国家思想」に対して反対したとしても、彼を忠誠心と愛国心が欠如した者であると見なすことはできない。なぜなら、彼は形式的な儀礼上の不忠よりも、行為上の不忠を重要視したからである。

内村の愛国心をよく表す言葉として、「二つのJ」がしばしば引用される。また、それは彼の人格と思想の核となっていると考えられる。原文は英文で、標題は「Two J's」であるが、道家弘一郎訳によって主要な部分を引用しておこう。

「わたしは二つのJを愛する、その他を愛さない。一つはイエス (Jesus)、一つは日本 (Japan) である。わたしは、イエスと日本の、どちらをより愛するか知らない。わたしはイエスのためヤソとして日本人に憎まれ、日本のため外国の宣教師には国民的であり、視野が狭いと嫌われる。しかし、構わない。わたしはすべての友人を失っても、イエスと日本を失うことはできない。……イエスと日本、私の信仰は一つを中心をもつ円ではない、それは二つの中心をもつ楕円である。わたしの心情と知性は、この二つの親しい名前のまわりを回転する。そして一方が他方を強めることを知る。イエスは、日本に対するわたしの愛を強め清める。日本は、イエスに対するわたしの愛を明確にし目標を与える。この両者がなかったならば、わたしは単なる夢想家となり、狂言者となり、漠然たる一般人となったことであろう。イエスはわたしを世界人とし、人類の友とする。日本はわたしを愛国者とし、それを通して固くわたしを地球に結びつける。わたしはこの両者を同時に愛することによって、狭くなりすぎることもなく、広くなりすぎることもないのである。」¹⁷

この「二つのJ」は相互に強めあう関係にあったことは事実であろうが、しかし時には決定的に矛盾¹⁸することによって、彼自身に大きな困難をもたらしたこともまた確かであると思われる。その彼にとってのおそらくは最初の、重大な試金石は教育勅語をめぐる「不敬事件」であった。

「不敬事件」は彼の思想・人格の根本を揺さぶるものとなった。彼は、教育勅語は敬礼すべき対象ではなく、実行すべきものであると考えており、勅語に説かれている道徳自体についてはさほど批判的ではなかったようであるが、しかしそれらの徳目が政治権力によって強制され、それが彼自身の信仰や思想に迫ってくることについては、敏感にならざるをえなかった。その意味において、「不敬事件」はたいへん大きな意義をもっていたのである。¹⁹

内村の日本に対する愛国心とキリスト教信仰観には独特なところがある。

第一に、彼の愛国観は当時の日本における他の知識人や思想家たちのものとは根本的に異なっていた。彼は日本が誤った道を歩んで行く時には、それについて厳格に批判し、その過ちを正すよう要求することこそ「真の愛国心」だという信念を実践したのである。²⁰

第二に、彼のキリスト教観はその持ち味である独特な愛国心とも関係がある。彼の愛国は他国の人々の祖国愛を認めるものであった。いわば、日本には「日本のキリスト教」があり、また米国には「米国のキリスト教」があり、そして朝鮮には「朝鮮のキリスト教」があるということである。

このような特徴が、彼の独特なキリスト教理解と同じ比重で、あるいはより重要な徳目として韓国人の弟子たちに感銘を与えた。また、このような要素に基づいて、韓国における内村の弟子たちは、彼から感動的に学んだ「愛国」と「その国にふさわしい福音」を実現するために献身するようになった。ところで、ここには一つの葛藤が内在している。内村が愛する国は「日本」であり、彼が理想として実現すべき目標は「日本的キリスト教」であった。内村の韓国人弟子たちが愛する国は「朝鮮」であり、その理想として実現すべき目標は「朝鮮的キリスト教」であった。当時「朝鮮」は「日本」の統治下にあり、朝鮮的なものは日本的なものとは互いに敵対的緊張関係に置かれざるをえなかった。²¹

2. 金教臣

2.1 生涯

金教臣は、キリスト教徒であると同時に教育者であった。近代韓国が生んだ民族的キリスト教理念を唱道した「無教会クラブ」の指導者であった。彼は1918年に咸興農業学校を卒業した後、翌年日本に渡り東京正則英語学校に入学した。この頃彼は、儒教的人生観と世界観に強い懐疑心を抱き、内村の門下に入って7年間学んだ。その後、1922年に東京高等師範学校の英文科に入学したが、思う所があって地理博物科に転科し、1927年に卒業した。同年、帰国した後、정상훈(ジョン・サンフン)・咸錫憲(ハム・ソクホン)・송두용(ソン・ドゥヨン)・유석동(ユ・ソクドン)・양인성(ヤン・インソン)など、内村の門下六名と共に『聖書朝鮮』²²という信仰雑誌を発刊した。その雑誌は、1930年5月号である第16号からは、彼自身が主幹となり編集する「信仰同人誌」に変わった。その後12年間、日帝当局の厳しい検閲に耐えながら刊行し続けたが、1942年3月の第158号の題字『吊蛙(蛙の死を悲しむ)』が、如何なる寒さにも

耐え、生き残る蛙の生命力に喩えて民族の希望を唱えたとして検察に解釈され、廃刊となってしまった。このために、金教臣は1年間獄中生活を余儀なくされ、全国にいた数百名の雑誌購読者も苦難を被った。彼は信仰雑誌を刊行しながら、民族私学の教師生活を貫き通した。奉職した学校は、咸興にあったヨンセン女高普・ヤンジョン女高普・開城にあった松都高普であった。一般的に、教師は年単位で採用されるが、異例なこととして6ヶ月間、京畿高普でも教えた。担当した科目は主に地理であった。特にヤンジョン女高普には10年間勤務しながら、次元の高い愛国の道と真摯な求道の姿勢を自ら見せることにより、学生たちに大きな影響を与えたのであった。出獄後には、祖国解放の日が近いことを予感し、韓国・満州間を行き来しながら信仰同志たちを督励した。この時、彼は興南窒素肥料工場において、五千名を超える韓国人労務者たちが、ひどい苦しみを受けていることを知り、彼らの教育・福祉・厚生問題を助けるために同志たちと共に工場に勤務した。彼は主に韓国人労務者寄宿舎で奉仕していたが、解放直前に、咸鏡道一帯に広がった腸チフスにかかり、1944年4月25日に永眠した。

2.2 無教会主義

内村の弟子である金教臣は、内村の精神的遺産を守りながらも、内村の無教会主義の中心は何かと問うことによって、自らの無教会主義を展開していった。

金教臣は、「問題が教会に関連しては居るけれども、単に教会のみに関してならば、無教会主義は存つてもよし無くてもよし」という咸錫憲の無教会主義理解に同意し、無教会主義をキリスト教全体に関連する一つの精神の否定的な自己表現として理解した。その精神とは、金教臣にとっては「自己(キリスト者)の全生命をキリストに委ね、従来の自己標準・人間中心的な生をキリスト標準・神中心の生に改める」ことであり、「自己については死に、キリストによって生きること」であった。そして、このような精神を「神絶対中心主義」と名付け、それが無教会主義のより積極的な自己主張であると考えた。²³

金教臣はこの「神絶対中心主義」の最大の脅威は、人間中心的な自己主張であり、それこそ神に対する人間の最大の罪であると考えた。そこで、「神絶対中心主義」を貫徹するためにすべての「人間中心主義」を排撃する必要性を感じて、金教臣は教会の人間中心的な要素に反対し、無教会主義を主張した。²⁴

このように金教臣は、無教会主義とはすべての教会が常に自らを検証する精神的尺度であり、無教会とは形態として具現されることのないすべての教会の見えない精神的原型であると考えたのである。いいかえれば、金教臣にとって

無教会主義は、無教会の集いまで含むすべての教会に対して、その限界を明らかにすることによってしか自らを表現することができない「神絶対中心主義」の否定的な精神なのである。

しかし、「神絶対中心主義」は否定的な姿のみを持つものではない。それは教会に対しては否定的な姿としてしか現れないが、積極的な姿として現れる場もある。その場とは金教臣によると、無教会主義者の生そのものであった。つまり、無教会主義者が自身の生活領域で「神絶対中心主義」に基づいて生きることによって、無教会主義は教会に対する否定的自己表現としてだけでなく、「神絶対中心主義」の積極的な自己表現までが可能になると金教臣はいう。したがって、無教会主義の積極的な姿は、教会問題に対して否定を発するところにあるのではなく、むしろ「神絶対中心主義」によって、キリスト教の真理そのものを生きる場所にあると見た。そして金教臣は、キリスト者の全存在領域で「神絶対中心主義」に基づいて生きようとするを、「全的キリスト教」といい、自身の無教会主義の立場とした。²⁵

2.3 朝鮮的キリスト教

金教臣はキリスト教の愛とは、「最も憎い人や最も呪いたい国と民族を熱愛すること」であるとした。

「愛することができないものを愛するのが、キリスト教の愛である」と見た彼の考えは、現実の中で如何に現れたのだろうか。しかし、この問題を扱う前に、金教臣が朝鮮に対して、どのように感じていたかを理解する必要がある。

金教臣は日本帝国時代の朝鮮人ゆえに、キリスト教の天国に関する問題を保留したのであった。それは天国を後回しにしたとしても、まず民族の道徳性を回復させたかったからである。『聖書朝鮮』に出ている例を見ると、それが良くわかる。日本の静岡県にいる朝鮮人労務者は、「朝鮮人たちは最後に米代を払わないで逃げて行ってしまう」といううわさのために、米も十分に入手することができなかつたし、大阪の朝鮮人に対しては、蔑視がひどかった。それは彼らがあまりにも簡単に引越しをし、信用を失いがちだったからであった。彼らは得たお金を連絡船費用としたのであり、乗船者の三分の二は朝鮮人であり飢えた者たちであった。²⁶

金教臣は朝鮮の現実に絶望した。しかし同時に、その絶望の中にも希望を見出した。それは「誰でもキリストの生命に連なりさえすれば、地から離れて天に飛躍することができる」²⁷という可能性であった。

朝鮮の貧しさは朝鮮人の精神的危機をもたらし、その程度は絶望的であったが、彼がこの絶望を希望の根拠として見ることができたのは、他でもなく信仰

ゆえにであった。

金教臣は朝鮮の貧困を神の摂理と見た。彼は朝鮮の歴史の背後に神の御旨があると考えた。それは「神の経綸は、貧しく蔑視され、生来の傲慢な根まで抜かれた者になされるから」である。彼は神の権能が現れるための前兆として、朝鮮の荒廃を見たのであった。

また彼は、朝鮮の独立如何は信仰に依存するものと考えた。即ち、民族が正しく立つことができるのは、信仰によってのみ可能であるとした。したがって、朝鮮はまず悔い改めるべきであり、神と人、人と人同士の正直な関係が回復されるべきだと主張した。

金教臣は、神の経綸がこの地に現れるためには苦難を受けねばならず、朝鮮は現実を克服して正しく立つために信仰が必要であるとした。即ち、自らの時代こそ、天上の御旨と地上の願いが一致する時であり、その媒介を朝鮮の凄惨さに見出した。

そこで彼は、神に仕え、朝鮮を取り戻すための最善策として、「朝鮮に聖書を与える」ことにした。

「聖書を朝鮮に：愛する者に与えたいものは、一つ二つに止まらない。天の星でも取ってあげたいが、人間の力には自ずから限界がある。ある者は音楽を朝鮮に与え、ある者は文学を与え、ある者は芸術を与えて、朝鮮に花を咲かせ、服を着せ、冠をかぶせるが、ただ我々は朝鮮に聖書を与えてその骨格を築き、その血液を作ろうとする。同じキリスト教徒でも、ある者は祈祷生活の法悦を唱え、ある者は靈的体験の神秘世界を力説し、ある者は神学知識の組織的体系に傾倒するが、我々はただ聖書を学び、聖書を朝鮮に与えようと思う。もっと良いものを朝鮮に与えようとする者がいれば、与えてみよ。我々は、ただ聖書を与えようとして微力を尽くす者である。ゆえに聖書を朝鮮に。」²⁸

金教臣がこの文章を記したのは、1930年代に入って実施された日本による皇民化政策が加速化された時であった。この後神社参拝が強要され、民族抹殺政策が続いた。このような朝鮮消滅の危機ゆえに、『聖書朝鮮』はより一層、朝鮮的な内容になったと言える。そして『聖書朝鮮』は、日本化された朝鮮ではなく、朝鮮が「永遠なる朝鮮」として存在するための預言的文章となった。

さらに理想的な朝鮮を立てるという目標を実現するために、朝鮮は存在しなければならなかった。そのために信仰が民族の上に求められた。このことは以下の文を通して明確に知ることができる。

「朝鮮を聖書の上に：科学知識の土台の上に新しい朝鮮を建設しようとする、科学朝鮮運動が時代に不適切なのではなく、人口の八割以上を占める農民により、デンマーク式の農業朝鮮を促進させようとするのが時宜に合わないのでもなく、その他、新興都市を初めとした商工朝鮮や、思潮による共産朝鮮なども、全て誠心誠意から出たものであって有害なものではない。しかし、これらは全て、野に咲く花や朝露のように、今日はあるけれども明日にはなくなってしまうものであり、砂の上に建てた家のように雨風によって壊れてしまうものである。従って朝鮮の下に永久的基盤を作る基礎工事が、即ち、聖書の真理を民に所有させることである。広く深く朝鮮を研究して、永遠の新しい朝鮮を聖書の上に立てよ。ゆえに、朝鮮を聖書の上に。」²⁹

彼は聖書が朝鮮に必要であると見たのである。金教臣のこのような愛国心は、閉鎖的な民族主義とは違う。朝鮮だけを愛することではなく、彼は朝鮮が世界人類のために生きようとするれば、まず朝鮮を聖書の真理によって立てねばならないと見た。即ち、世界のための民族として朝鮮を把握したのであった。

金教臣の愛国観は、内村のものと類似している。内村の日本に対する真心と、金教臣の愛国心とを比較すれば、次の通りである。

「内村：

I for Japan； 自分は日本の為に

Japan for the World； 日本は世界の為に

The World for Christ； 世界はキリストの為に

And All for God； 凡ては神の為に」³⁰

「金教臣：

聖書と朝鮮； Bible and Korea

聖書を朝鮮に； Bible to Korea

朝鮮を聖書の上に； Korea on the Bible」

金教臣と内村を通して、キリスト教的民族主義の真の姿を見ることが出来る。内村は日本を通して世界に、さらに神に仕えるようにし、金教臣は朝鮮を通して世界に寄与しようとした。

金教臣は真の教会を無教会、即ち、「全的キリスト教」とした。「キリストのみを通した救い」、「聖書の真理のみを明らかにする」ことを教会の本質とした。

盧平久³¹は金教臣のキリスト教思想を評して、「キリスト教会のように制度・組織・伝統・儀式・教会・神学・キリスト教思想・事業等によってではなく、それも経済的な支援と共に外国伝来のそのままの形で受け入れるのではなく、朝鮮人の魂によるキリスト教経典自体の研究によって、民族的な消化」³²を図ったものだとした。即ち、金教臣はキリスト教の原形を欧米諸国のキリスト教からではなく、ただ信仰から探した。

このような金教臣の朝鮮的キリスト教に対して三つの側面、即ち、全的キリスト教の教会に対する態度・反宣教師的態度・内村を克服した点について論じることにする。

第一に、金教臣の全的キリスト教の、教会に対する態度を見る。金教臣の無教会精神は「教派根性を捨てて、ただキリストを中心として生き、真理で判別できること」であるとし、「無教会信徒は預言者」であるべきだとした。

無教会信徒の教会に対する預言者的闘争は、教会が救いを信仰に置かず、教派や教会の専有物のように扱う時に行われる。信仰よりも教派が優先され、聖書よりも教理が優先される時、無教会主義者は教会に対して、その誤りを指摘する。

金教臣の朝鮮教会に対する望みは、実に単純なものであった。教会は教派意識を捨てて、神の御言葉にしたがって生きる法のみ教えれば良いとした。

第二に、金教臣の反宣教師的特性に関して見る。金教臣は先に述べたように、「熱心な長老教信徒やメソジスト信徒になるよりも、善良な朝鮮人」になることを願った。彼が考えるキリスト教徒の集まりは、既存の教派教会とは全く異なるものであった。

実際、朝鮮に伝播されたキリスト教は、西欧の教派的特性が色濃いプロテスタント教会であった。宣教師たちは朝鮮にイエスを伝えただけではなく、蛇足とも言える教派まで移植したのであった。朝鮮の意図とは反対に、朝鮮半島の宣教は教派別に分割された。そして、宣教師や米国留学を通してキリスト教を学んだ朝鮮人宗教家たちも、大体宣教師たちと同じ傾向に流れた。

金教臣はキリスト教が真の姿を模索するためには、宣教師と外国の宣教資金から独立するべきだと見た。朝鮮のキリスト教会が宣教師路線に追従すれば、キリスト教は国籍を失い、結局は民衆の中に深く根を張ることができず、また、宣教資金に依存すれば、「自分と自分の教会だけがあって、朝鮮と朝鮮人の体面は念頭にもない教会」になってしまうとした。

第三に、内村を克服した点に関して論じる。金教臣と彼の無教会陣営に対する批判の別の面は、日本式無教会、即ち、内村に対するものである。『聖書朝鮮』の同人たちが内村に師事していたことは、周知のことである。特に金教臣

は、「内村は私の唯一の師匠」であると言うほどであった。金教臣は内村からキリスト教だけではなく、愛国心においても否定できない感化を受けた。しかし内村の愛国の対象は日本であり、金教臣の対象が朝鮮であった所に違いが生じたのであった。

金教臣は日本人から学んだが、朝鮮魂が生きている朝鮮人であった。内村の祖国は、帝国主義で他民族を支配する能力を持っていた。内村の愛国心は、世界の秩序と被植民地の平和のために日本政府に対して、非戦論を主張することができた。しかし、金教臣の朝鮮は、日本の植民地統治により、暗黒の地・貧困の地だったのであり、民衆の叫びが教会の十字架よりも高くそびえる地であった。金教臣にとっては、朝鮮の痛みを如何に收拾し、民族精神を再興させるのが、重大な問題であった。³³

結局、この違いは、金教臣を内村の教えと真っ向から衝突させながら、克服せざるを得ない過程に導いた。ゆえに金教臣は「内村は内村で、私は私である」とし、「内村には内村の時代と立場があり、我々には我々の時代がある」とした。金教臣は内村を通して聖書を学んだが、実践の場は朝鮮であった。大きな影響を受けた師匠内村であったが、朝鮮に対する愛は結局、金教臣を内村から独り立ちさせた。

朝鮮は金教臣を内村から離れるようにした。同時に、彼を徹底した朝鮮人としてのキリスト教徒に立ち返らせた。ゆえに彼は、朝鮮の信仰は、朝鮮式に独立すべきだと説いたのである。

3. 共通点と相違点

3.1 共通点

ここまで、内村と金教臣の無教会主義に関して論じてきたが、彼らの思想の共通点をいくつか挙げるができる。

第一には、神中心の純粋な福音的信仰である。

内村の信仰は、最初から人間的な媒介を経ずにキリストに直接連なり、人間的な権威からの独立という強い性格を帯びていた。そして、信仰が極めて人間中心になってしまった点を鋭く批判していた。彼の信仰は伝統的なキリスト教本来の姿を追求し、福音信仰に共鳴する人によるコイノニアを築こうとする純粋信仰であった。

これと同じく、金教臣は「従来自己基準・人間中心の生」から、「キリスト基準・神中心の生」への転換、即ち、自己に対しては死に、キリストによって

生きるという、「神絶対中心主義」で生きることを、「全的キリスト教」とし、自らの無教会主義の立場とした。

第二には、教会に対する批判である。

内村は教会と教会人を批判したが、「教会勢力の拡大」伝道が人間の事業に墮落してしまった「有給伝道」や「教派問題」等に関して辛辣に論じながら、その原因を「欧米帝国の教会と宣教師」に限定した。

金教臣は「教派」や「教会組織」に対する批判をしたが、教派化する「無教会」自体に対しても反発し、「無教会化」した「無教会」に対しても、自身を分離させた。彼は信仰のみ、イエスのみがある、真の教会の永遠なる「無教会人」であった。

第三には、欧米帝国と宣教師に対する反宣教師的性格と、そこから国を救おうとする愛国心である。ただ、この愛国心は、国を救うという意味では共通しているが、厳密に言えば、根本的な違いを有してもいた。この点については、次節で述べることにしたい。

3. 2 相違点

金教臣は内村から無教会主義を学んだために、大部分において共通していることは当然であるが、その一方で相違点も見出すことができる。

第一に、内村の無教会信徒の大部分は知識人で構成されたエリート層であったが、金教臣は朝鮮全体に対する民衆的信仰を目指した。

内村の信徒たちは、明治初期にプロテスタント教会が西欧文化と共に日本に入ってきた時、これに深い関心を示し心酔した、当時の知識欲旺盛な青年や学生たちであり、彼らの大部分が日本社会の上層である武士階級の子弟たちであった。

しかし、金教臣は、貧しく絶望的な朝鮮の消滅という危機に、日本化した朝鮮ではなく、永遠なる朝鮮として存続するように、朝鮮全体に向かう民衆的信仰を目標とした。興南窒素肥料工場で韓国人労務者たちの教育・福祉・厚生問題等に従事した末、亡くなった彼の人生は、このことをよく示している。

第二に、愛国心における相違である。内村の愛国心は、宣教師による日本の植民地化を案じたものであったが、金教臣の愛国心は、日本からの独立を切望する愛国心であった。

内村は教会で生じる教派争いは、欧米帝国の教会や宣教師ゆえであると激しく攻撃し、宣教師たちによる日本の被植民地化の危険性を警告した。また、反キリスト教的ナショナリズムの性格を抱いた「日本的キリスト教」だけが国を救うことができると主張し、「日本 (Japan)」と「イエス (Jesus)」を同時に愛

すべきだとした。

金教臣は朝鮮に伝播されたキリスト教は、西欧の教派的特性の濃いプロテスタント教会であり、宣教師たちは朝鮮にイエスだけをもたらしたのではなく、蛇足である教派まで移植したと見た。朝鮮のキリスト教が真の姿を模索していくためには、宣教師と外国宣教資金から独立し、朝鮮の信仰を朝鮮式にするべきだと主張した。彼は「キリスト教」と「朝鮮」の二つの内で一つだけを選ぶとしたら、ためらいなく「朝鮮」であるとした。

内村が「日本」と「キリスト教」のいずれかの選択を迫られた時、両方であると言い、日本の「国家神道」に対して肯定も否定もしなかったのは、果たして真の愛国心であると言えるのか、疑わしい。不敬事件の時まで、内村は「天皇制」と「近代国家思想」に反対したが、不敬事件以後の著述³⁴の中では、過激であった自らの行動に対して、後悔する様子を見せている。

一方で、金教臣は、「朝鮮」と「キリスト教」の内で「朝鮮」を選択すると強く主張した。彼は、ただ「朝鮮」のために生きて死んでいった、真の愛国心を持った「朝鮮人」であった。

おわりに

内村の無教会主義信仰は、直接、神と交わる中で成長していく信仰であり、最初からキリストに直接連なり、人間的権威から独立した性格を強く帯びた、神中心の信仰であった。内村は、宣教師のキリスト教伝道による日本の被植民地化を危惧し、日本で誕生した「日本的キリスト教」の必要性を訴えた。それは、「武士道」精神に由来し、「天皇制」と「近代国家思想」に反対した、内村の愛国心ゆえであった。

金教臣は、真の無教会とは、利己的制度と組織を脱却し、信仰によって結ばれた共同体であるとして、対教會的無教会を主張した。そして、金教臣の主張する「朝鮮的キリスト教」の主要な点とは、第一に全的キリスト教の教会に対する態度、第二に反宣教師的特性、第三に内村を克服した点であった。

内村と金教臣の無教会主義の共通点を要約するならば、第一に、神中心の純粋な福音的信仰、第二に、教会に対する批判、第三に、欧米帝国と宣教師に対する反宣教師的性格と、そこから国を救おうとする愛国心になるだろう。

しかし、両者の間には、二つの決定的な違いがあった。ひとつは、内村の無教会信徒の大部分が、知識人で構成されたエリート層であったのに対して、金教臣は、朝鮮全体に向かう民衆の信仰を目指したことである。いまひとつは、

愛国心における相違である。国を救うという意味においては共通する両者の愛国心であるが、内村の愛国心が、宣教師による日本の植民地化を案じたものであるのに対して、金教臣の愛国心は、日本からの独立を切望する愛国心であった。また、内村は「二つのJ」、即ち、神と国のいずれか一方を選択することができず、両方を愛すると言わざるを得なかったが、金教臣は「キリスト教」と「朝鮮」のうち「朝鮮」を、即ち、国を選ぶと断言した。

以上、無教会主義を中心に、内村鑑三と金教臣について論じてきたが、不十分な点も多いことと思われる。そこで、以上の研究から見えてくる、いくつかの疑問点について考察することを今後の課題としたい。

具体的には、内村が生きてきた近代日本の時代的背景も視野に入れながら、「不敬事件」と「3回の回心」を中心とした彼の心境変化を探ることにより、彼の「無教会主義」とは何であったか、既存の教会から「独立」するため、ある形態を持つ教会論的主張にすぎなかったか、それとも、神（Jesus）との直接的な交わりを重視する「真のキリスト教精神」であったかを明らかにし、また内村自身もすでに自覚していた矛盾、「二つのJ」の真意について追究して行きたい。

そして、内村の思想を受け継いだ韓国の弟子である金教臣の「無教会主義の独自性」は何かをも追究し、両者の思想的関係から映し出されてくる「日韓の近代宗教文化」の一側面としての比較考察が出来ればと考えるものである。

そのため、内村の「告白」とも言える彼の日記、彼の自伝、或いは、内村研究者達の研究資料などの客観性と信憑性にも注意をしながら、より詳細な研究を進めていきたいと思う次第である。

註

- 1 内村鑑三著 山本泰次郎編著『内村鑑三信仰著作全集18』教文館 1962年 238頁
- 2 内村鑑三著 山本泰次郎編著 前掲書 86頁
- 3 内村鑑三著 山本泰次郎編著 前掲書 87頁
- 4 現在、「朝鮮」は「朝鮮民主主義人民共和国」を指すが、歴史的に1910年～1945年の時期は「朝鮮」であったため、「朝鮮」という表現を使うことにする。
- 5 韓国国会図書館に登録された修士・博士論文の中で、内村鑑三と金教臣の無教会主義に関連した論文（7篇）と閔庚培（ミン・キョンベ）の小論文

一篇、全部で八篇の先行研究があった。関庚培を除く7篇の論文では、内村の無教会主義、即ち日本的キリスト教と金教臣の朝鮮的キリスト教、そして無教会主義に関する内容が共通しているが、内村の日本的キリスト教を形成した愛国心と金教臣の朝鮮的キリスト教を形成した愛国心を似通った脈絡で扱っている。この点において、本論者は少し見解が異なる。それは、二人の愛国心が特定のキリスト教思想を成した核心であり、金教臣が内村の思想を継承して朝鮮的キリスト教を形成したとは言うものの、その根源においては厳然とした違いがあるからである。

- 6 メソジスト派宣教師
- 7 魂の救いを得ること。
- 8 内村が勤務していた第一高等学校で、1891年1月9日午前8時に開始された勅語奉読式の際、明治天皇の署名に対し「奉拝」をしなかったため、不敬な人物として扱われた事件。
- 9 「無教会」という文字は、『基督信徒のなぐさめ（第三章 基督教会に捨てられし時の51項）』の中で初めて用いられたものであろう。
- 10 理想団は特別な方法で社会改革を目指した。それは、まず自分自身の改革を行い、その次に社会を改革しようとするものであった。
- 11 ……『信仰威信伝記：内村鑑三』한국문서선교회 1985年 53頁
- 12 人がちょっとした不快の感情を言い表すときにも、いちいち何かの宗教的な誓いの言葉を口にするのを耳にした。たとえば、「神かけて、あいつは悪魔だ!」といったたぐいである。
- 13 高橋三郎著 金裕坤訳『無教会精神の探求』雪友社 1981年 164頁
- 14 天下を一つの家のようにすること。第二次大戦中、大東亜共栄圏の建設を意味し、日本の海外侵略を正当化するスローガンとして用いられた。
- 15 방종근 (バン・ジョンゲン) 「日本の 歴史文化的 상황과 宣教실천의 과제」韓神大大学院 1995年 71頁
- 16 もちろん当時はこのことばはまだ使われていない。天皇制ということばが用いられるようになったのは、コミンテルンの「三二テーゼ」以降であると考えられる。
伊東昭雄 「日本の植民地支配と天皇制」横浜市立大学学術研究会編 『横浜市立大学論叢』 第43巻 人文科学系列 第1号 288頁 291頁
- 17 伊東昭雄 前掲論文 264-265頁
- 18 矛盾に関してはいろいろな見解があるが、今後の課題にしたいと思う。
- 19 伊東昭雄 前掲論文 269頁
- 20 徐正敏著 『겨레사랑 성서사랑 (民族への愛、聖書への愛) 金教臣先生』

- 말씀과 만남 2002年 34頁
- 21 蔵田雅彦訳 徐正敏著「内村鑑三の韓国観に関する解釈問題」桃山学院大学 総合研究所『キリスト教論集』第31号 141-142頁
- 22 1927年7月に創刊された同人誌であり、朝鮮のための愛国の道は、聖書を朝鮮に伝えることであり、民族に伝えることであるとした。
- 23 梁賢恵（ヤン・ヒョンヘ）著 『은치호 (윤·치호) と金教臣』図書出版 한울 1994年 132頁
- 24 梁賢恵著 前掲書 133頁
- 25 梁賢恵著 前掲書 134頁
- 26 박영호 (パク・ヨンホ) 「김교신의 朝鮮적 기독교연구」浸礼神学大学院 1989年 20頁
- 27 同上
- 28 박영호 前掲論文 22頁
- 29 同上
- 30 鈴木範久著『内村鑑三』岩波書店 1984年 40頁
- 31 無教会主義者。信仰雑誌『聖書研究』の発行人。『金教臣全集』の著者。
- 32 박영호 前掲論文 29頁
- 33 박영호 前掲論文 36頁
- 34 内村鑑三著『基督信徒のなぐさめ』岩波書店 1939年 28-29頁

